

# 角張成阿上人が本になります

## — 寺報を手にされる方々に —

高橋 富雄

浄蓮寺檀信徒のみなさん、久しぶりでございます。でもみなさん、わたくしの名前、ご記憶でしょうか。

平成十一年十一月のことでした。

小林ご住職の特別なおはからいによりまして、わたくしは当寺本堂におきまして、「この師この弟子—法然上人と角張成阿—」という題のもとに、ご当地ご出身で、当寺ご開山の角張成阿弥陀仏と祖師法然上人との深い師弟関係について、お話をさせていただきますました。

その時の講師でございます。そのご縁でこうしてまた紙上対面できたのでございます。あの時の講演は、これもご住職のご配慮によりまして、「角張成阿上人講演会講演録」としてその内容が小冊子にまとめられて出版され、わたくしとしては、思い出に残る信州出版となり、心から感謝しているところでです。

わたくしと角張成阿との出あいはい偶然のものでした。「大菩薩峠」の作者として誰知らぬ者のない著名な作家中里介山に『法然』という一般向け評伝があり、戦後のある時期、古本として手に入れ、読んでみて、

法然上人を論じたどのような本にも見られない、すばらしい卓論が随所にちりばめられていて、深い感銘をうけました。その中に、角張成阿のことについて言及した『正源明義抄』という法然伝記からの引用があったのです。

この本は、法然伝記としては比較的新しいものですから、宗門・宗学の方々も二流・三流扱いし、介山もここではその説に従って、これを参考として引用していたのですが、読んでみて、どうしてどうして、角張成阿という弟子を、その師法然上人と並べ、比べてみて、芝居だったらどちらが主役、どちらが脇役か、甲乙つけがたい性格にえがきとられてるのに感動してしまったのです。

有名な「大原談義」のくだりでした。わたくしは、それから、法然伝記については、ただ古い新しいだけで、いい悪いをきめてしまっただけでないかと思うようになって、そういつきつかけをつくってくれたこの角張成阿という人、これはただ者でないと思つて、それから法然関係の書物の中で、この人がどう扱わ

れているか、注意してきたのですが、どこにもほとんど出てきません。

いよいよこれは掘り出し物になると、心ひそかに期するところがあつて、すこしずつ材料を集め、何とかものにしようと思うようになったのです。ちょうど、その時でした。平成十一年二月、浄土宗長野教区研修会に招かれまして、お話しする機会がありました。その時は、法然法語についてのお話でしたが、長野のことですので、多少長野にかかわりのあることにもふれておこうと思つて、サービスのつもりで、かの大原談義の角張成阿のことにもふれたのです。

わたくしのつもりでは、長野の方々も、この人に気づいておられないのではないかと思つて、情報提供のつもりだったのです。豈図らんや、専門家がおられたのです。それが小林住職でした。休憩時間にお目にかかつて、角張成阿開基の由緒の寺を守り、その顕彰の仕事を世職となさつておられることを聞かされて、心機一転、それからは、この件については、すべて小林住職のご指導・ご協力を仰ぐようになって、わが角張成阿研究は、どうやら体をなすようになりまして、当寺における講演も、その中間報告のようなものでした。

講演集をおまとめいただいた後、

わたくしはご住職から、これをもとに、本格的な研究をまとめることを、つよくすすめられ、各種の資料提供にもあずかりました。わたくしも、折角乗りかかった船です。何とかまとめたと思つて、せいぜい努力して、いちおうのまとめに至りつきました。

十分なものではありません。しかしこれは、角張成阿という人をはじめて、歴史の人にしたい本です。それは法然上人伝記を新しく書きかえることを迫る数々の問題提起を含んでいます。長野からの新しい学問発信にもなるものと、わたくしは心ひそかに期待しています。

角張上人供養のためにも、これまでの小林ご住職のご恩のかずかずに對する報恩・感謝のためにも、郷土長野から出版できたら、最高の記念になる——そういうねがいが叶えられて、今回地元長野からの出版が実現し、檀信徒のみなさん方のお手元にお届けできるようになりました。感謝これに過ぎるものではありません。謹んで合掌、ご挨拶と致します。

(東北大学名誉教授、文学博士)

◇

高橋富雄先生ご執筆、浄蓮寺編『評伝 角張成阿弥陀仏—法然伝記を新しくするもの—』は、四月十八日に、信濃毎日新聞社から発売されます。